

# 沢蟹と至福の時

吉川友二

二〇〇〇年六月一日、足寄町に引越してきた。足寄の高台。戦前は軍馬補充部として使われ、戦後に農地として開拓された。そこに長野県の飯田から入植して、拓かれたKさんご夫妻の牧場を引き継ぐためである。はじめの半年間は町から通いで仕事をした。牧場で働いて水を飲んで空になったペットボトルを町へ持って帰ると、かなりへこんでいる。そんな所だ。

一九九一年に学校を卒業してから最初の四年間は、夏は上富良野、旭川の牧場の他、北海道各地で有機農法を實踐している農家を訪ねて働かせてもらった。冬は名古屋の車工場の期間工や、東京で型枠大工の仕事をした。その後の四年間は、ニュージーランドへ渡って酪農場で働いた。

小さい時の体験をずっと大切にしていた。そのおかげで、糸の切れた凧のようにならなかつたのだと思う。小さい時には、それは大切というよりも切実な感情であったのだが。それは、自然が破壊されていくことに対する悲しみと、破壊をする社会に対する怒りである。大きな借金をしてまで就農することに決めたのも、足寄町に

決めたことも、自分で決めたというよりも、なにかが導いてくれている感じがした。今までの十年間の放浪はなんだったのだろうかと思うくらいに、足寄町での就農の話がとんとん拍子に進んでいった。なにかこの土地に自分が選ばれて、呼ばれてきたのではないかとさえ思われた。就職もせずに、小さい時の思いをずっと大切に、社会へ一歩踏み出したら、次から次へと思ひもかけなかつたことが起きて、この地に落ち着くことが出来た。

足寄町で迎えるお正月も今年で十度目である。新年に買ったばかりのスタジオリのCDをプレーヤーにかけると、思いもかけず、「ケ・セラ・セラ」の歌が流れてくる。

自分が小さい時、夜眠れないと、両親がこの歌を歌ってくれたことを思い出す。しくしくとベそをかいて、ふすまを隔てて隣の部屋にまだ起きている両親のところへ行く。父は、子供の前で歌を歌ったりしなかつたが、このときに「ケ・セラ・セラ」を歌ってくれた。「なるようになる あすのことなどわからない」。父は何の不安も心配事もなさそうに見える。父のように大人になったら、心配事やらつらいことがなくなるのだろうか。つらい時は、自分も早く大人になりたいとよく思ったものだ。

このジブリの二枚組みのCDを買ったというのは、最

近、小学一年生になった一番上の息子が「かなしみは数えきれないけれど…」と、ときどき口ずさむのを耳にしたから。ジブリのアニメ映画の『千と千尋の神隠し』の主題歌の「いつでも何度でも」の歌詞の一部分だ。この映画は二〇〇一年にヒットして、この歌もヒットした。レコード大賞か何かのテレビで、女性が、小さなハープを手に、歌っているのを一度聞いたことがある。

夜寝る前に子供たちに絵本を読んでいる。一年近く前にテレビが壊れてからできるだけ、二歳から六歳までの四人の子供に一冊ずつ読むように努力している。二・三年前に買った『千と千尋の神隠し』の本は人気で何回か読んでいる。長い本なので、何日かに分けて読むことになる。何回読んでも、ハク童のうろこがきらきらと剥がれ落ちるシーンでは涙ぐんでしまう。そして物語の終わりには、裏表紙の見開きにある、「いつでも何度でも」を子供にせがまれたわけでもないのに、勝手に曲を作り、ごまかしながら歌うのだ。そんなことをしていたので、本当はどんな歌なのか確認したくなって買ったというわけ。

『千と千尋の神隠し』は偶然に、足寄町で二〇〇〇年の秋に知り合って、翌春に結婚した妻と、秋に北見のデパートにある劇場で見ている。それまでジブリの映画など一度も見なかったし、ヒットした映画など見

たくはないという性格だった。これもきっと子供だましの映画だと思ってるつもりもなかったが、北見の友人との待ち合わせ時間をつぶすのに、この映画しか時間が合わなかった。

見始めると、両親がブタに変わる頃には、すっかり引き込まれていた。あの豊穡なイメージはどこから生まれてくるのか。湯屋に癒されに来た、河の神から、生活ゴミが膿のように出てくるシーンは環境保護へのインパクトのあるメッセージにもなっている。私も、こんなふう

に人を感動させる仕事をしたいと思いつつながら映画館を出た。

一九六四年、昭和三十九年に生まれた。東京オリンピックの年、高度成長期である。長野県の上田市の城下町の中で育った。上田は真田十勇士が有名な町である。この城下町は千曲川の河岸段丘の崖と、川に迫った山の崖を自然の要害としている。そして、町の入り口などの要所要所に神社仏閣を配置し、鉤形に曲がった道路、街道に沿って作られた家並みは、鋸の歯のようにぎざぎざに並んで、お城の守りとしている。

高校を卒業してから三年後に北海道に移り住んだ。四年ぶりに北海道から帰省したときに駅から実家まで歩いていると、自分がガリバーになって小人の国を訪ねてい

るような気がした。実家にいると、城下町全体が一つの大きな家で、道路が廊下、家々がそれぞれ部屋のように感じられる。それくらいに、路地にいる人の声も、近所の音も隣にいるかのように聞こえて、家も外に開放されている。自分が小さい時は、ツバメが土間の上に作った巢で子育てをしている間は、夜も昼も扉をすこし開けたまま、鍵も掛けずに行っていたことを思い出す。

上田の中心を流れる千曲川に無数の川が流れ込み、千曲川とその支流がそれぞれに河岸段丘を作って複雑な地形を作り出している。地図上の、無数の川を見ると、まさに日本は水の国と思わされる。支流を遡って行くと、稲作の水不足を補うために作られた無数のため池が作られ、でこぼこになっている。そして大小の山々に囲まれて、あるところは切り立ち、あるところは扇状地になってリンゴやぶどうなどの果樹が作られている。

私の父はサラリーマンであったが、母は農家に生まれて育った。母の長兄は実家の内村（うちむら）、長姉は長瀬（ながせ）、次姉は傍陽（そいひ）でみんな農業を営んでいた。規模は大きくなく、兼業農家だった。母はよく親戚の家にバスで連れて行ってくれた。傍陽へは汽車とバスを乗り継いでいった。この線路はその後すぐに廃線となってしまった。小さい時はとても遠くに感じていたが、中学生にもなれば、どこも自転車で行ける範囲

にあった。

記憶の最初は、田植えはまだ大勢の人たちが、かがんで手で植えていた。稲刈りは、自分がお手伝いできるくらいに大きくなるまで、鎌で刈っていた。長瀬の家でテレビを見ていたとき、手押しの田植え機の宣伝に、桜田淳子が出ていた。彼女が白い長靴をはいて田んぼに入っているのを見た伯父が、靴をはいて田んぼに入るなんてけしからんと怒っていたのは、夢だったのだろうか？

親戚の田舎へ行って、田畑でお手伝いをしたり、遊ぶのが大好きだった。大きくなって、母から「友二が小学生の時に、町でなく田舎に暮らしたい、と言われて本気で引越すことを考えた」と言われた。しかし、そんなことを言った当の本人は忘れていた。小学四・五年生の時だろうか、先生が、大きくなって車に乗る人、と聞いた。運転しないといったら手あげたのは私一人だった。どうしてだと聞かれる。車が増えると子供の遊び場がなくなるからと答えた。馬鹿なこと言ってしまった、また怒られるかと思っていたら、先生がそんな考え方もあるなと言った怒らなかつたのが意外だったので、記憶に残っている。

田んぼや山や川で夢中になって遊ぶ。少し大きな川で泳ぐと、日の影っている淵まで流されたらきつと助から

ないだろうといった恐怖感。足を伸ばして腰まで水に漬つて一本竹の釣竿を水の中に沈めて、水の中に入れた手を前後にブランコのように揺らして魚を釣る。石の中に手探りで両手を入れて魚をつかみ取りにする。川のコンクリートの上に立っていると、土踏まずに魚がもぐりこんでくる。冬の魚の溜まり場へ行つてヤスで魚を突く。川の主を殺してしまうのではないかと怖くなるほど、大きな魚がいる。また冬は大きなハンマーで石を叩いて、石の下にいた魚がショックで浮いて流れてきたところを拾い上げる。

小さい頃の長瀬は、玄関には大きな土間があり、便所は外にあった。お蚕さんも飼つていた。ニワトリも四・五十羽位いる。庭には、田んぼの用水を引き入れ、六畳ほどの大きさの四角い池があり、鯉を飼つていた。河岸段丘の上と下に田んぼが広がっており、段丘の崖を上から下の田んぼへと小さな沢が流れ落ちていた。今ではどこにその沢があったのかも忘れてしまった。ごく浅い沢だが、崖の木立に囲まれて薄暗い。その沢へ行くと、いたるところに沢蟹が走りまわっている。捕まえてきては、自分の家の大きなたらいに、沢蟹をいっぱい飼つていた。

翌年、その沢にいつてみると一匹も沢蟹がない。どうしたのだろう。農薬のせいに違いない、と思つた。

上田の田舎町にも、高度成長の波が来たのだろう、次第に豊かになっていくのが肌身で感じられた。古い家が壊され、新しい家が建つ。白黒テレビがカラーになる、カセットテープというものを初めて見る。初めてグレープフルーツを食べたり、サラミをよその家で食べた時の感動。鳥かごに入ったインコまでやつてきた。その反面、新しい道路が出来たり、護岸工事、ダムの建設などで魚が減り、自分の遊び場が破壊されていく。

四・五年前に富山の黒部の妻の実家に帰省した時、妻の同僚だったK先生の家を訪ねた。家は田んぼに囲まれて、車がやつとすれ違えるほどの舗装道路の両脇に家が並んでいる。妻の友人達が大勢集まり、庭でバーベキューをしてくれた。日も暮れて、皆お腹が満たされてきた頃、K先生が十人ほどの子供たちのために、沢蟹を取りに連れて行つてくれるという。懐中電灯を持って、どこかに行くのかと思つてみると、すぐ家の前の舗装道路の脇を流れている田んぼの用水路である。

コンクリートでできた用水路は、大人の腰くらいの深さで、水は十センチくらいの高さで流れている。K先生は、用水路の上流にある門を閉めて、水の流を止める。そうして少し待つて水がなくなつてくると、用水路の下のコンクリートの割れ目から沢蟹が這い出してきたのだ。

おとしの夏の終わりに、上田に帰省した。父が孫のために、沢蟹を捕まえて、たらいで飼っていてくれた。子供たちは大喜びだ。父は歩いていけるところで捕ったのだという。そんなに近くで取れるのかと驚いた。自分の小さい時には、家の周りで沢蟹など取ったことがないし、家の近くで沢蟹が取れるなんて考えもしなかった。

秋の訪れを感じさせる日だった。みんなで公園へ遊びに行つて帰つてきて、夕食までにはまだ時間が有る。沢蟹を取りに行こうということになる。父の後に私と孫三人がついて、懐かしい路地を歩き、建設中のアパートのビルの間の狭い小道を歩いて、郊外へ近道をしていく。父が立ち止まったのは、昔はなかった蕎麦屋の裏。車通りの激しい道に蕎麦屋があり、裏に十台くらいの駐車場がある。店の隣は小さな田んぼである。お店と駐車場と田んぼの裏には、車通りの多い道路に平行して、車一台がやっと通れるくらいの路地がある。その路地に沿つて小川があった。漬物石くらいの石で組んだ壁があるが、ほとんどは泥土で作られている。大人がまたげるぐらいの幅で、十五センチくらいの深さの水が流れている。小川の前後はコンクリートの用水で挟まれ、五十メートル位の長さだろうか。

父について、探してみるが一匹も見つからない。子供たちは靴を脱いで、川に入つて遊び始める。前に父が来

たときには、人影がすると、沢蟹も逃げて行くので、すぐに捕まえられたという。K先生の家での沢蟹取りを思い出す。父が前に来たときには、用水の取り入れ口が閉じられて水が少なかったのではないかと。

はっと、小さかった頃のことを思い出す。突然に沢蟹がいなくなつたのは、農薬のせいではなくて、たまたまその時に沢の水量が多かつたからではないだろうか。

去年の夏の終わりに帰省した時に、父母と一緒に長瀬に挨拶に寄つた。小さい時に遊びを教えてもらったことも、もう大学生の子供がいる。お茶を飲んで落ち着くと、子供たちが沢蟹を取りたいという。時間もなし、遠くまで行くのは無理かなと思つていたら、いとこがスリッパを履いて、外へ連れて行つてくれる。昔、庭があった池に水を引き入れていた用水路に沿つて上に歩いていく。今はコンクリートで出来ていて幅は一跨ぎできるくらいで、高さは大人の腰くらい。水は五センチくらいの深さで流れている。用水路の左右には家が建ち並んでいる。いとこの奥さん、大学生の息子さんも出て来てくれて、十一人で狭い道を、沢蟹を探しながら歩いていく。木の扉の下から庭が見えて、昔、長瀬の家にあり、鯉を飼うというのはこのあたりの一般的な家のつくりであることに気がつく。百メートルも歩くと、二匹捕まえるこ



とが出来た。

長瀬の親戚と別れて、父母と山の麓にある公園で遊んで実家に帰る。夕食まで時間が少しある。父と二歳の子は疲れて家に残り、私と子供三人で去年行った小川に沢蟹を取りに行く。途中の建設中のアパートも立派に完成している。

今年も水量が多い。捕まえることはできるだろうか。去年と違っていることは、沢蟹がいることに確信があること。たまたま隙間の外に出ている沢蟹がいれば、捕まえられるかもしれない。三人の子供たちを後ろに従えて、沢蟹が見つからないように慎重に歩いていく。二匹の沢蟹をつかまえることが出来た。

車は 無事故の 幸せ運び

平成十九年 亥 M H子 八十八歳

この文章を書いている最中の、新年の十一月、朝起きると、小さな袋に、こんなことが書かれた紙切れが、机の上にあった。妻に聞くと交通安全運動で、保育所の子供たちが爪楊枝をいれて、配ったのだそうだ。車というと、環境の汚染、交通事故、そんな悪い側面だけを見てきた。でも、車無しでは過ごせない毎日、H子さんのように考えたら、日々の生活も楽しい。

四十五歳になった。今まで、子供の時の思いを抱えて夢中で生きてきた。一昨年、近くのお寺で小さなコンサートがあった。それに感動したからだろう、『千と千尋の神隠し』を見たときのことを思い出して、「自分も人を感動させる仕事になりたい」と話をする。すると「あなたが、今、ここに、いるだけで感動ですよ」と言われた。ようやく、人生の後半の課題に、取り組み始める時期にきているのだろう。

## 団塊の世代

足寄町立足寄小学校長

村 本 正 幸

私は、昭和二十四年生まれです。戦後のベビーブームの頂点の年です。日本中で、一番人口が多い年齢です。このことは、生まれてから良きにつけ、悪しきにつけ我々の年代に科せられています。

最近、我々よりもかなり若い年代層を見ると、理由がはっきりしないのに苛立ちを覚えます。「それもいいよ。違っていてもいいよ。そういう考え方もあるね」。本当にそうなのかな。若いのに、物分りが良すぎるのです。「他人は他人、自分は自分」と、あっさり割り切